

- 4) 姫田正美 1998. 農業経営者 35(12):18-21
- 5) 宮坂篤ほか 1999. 関東東山病害虫研究会 年報 46:9-10
- 6) WANG Y.ほか 1997. 日作紀 66(別2):17-18
- 7) 小荒井晃ほか 1997. 雑草研究 42(別):154-155

雑草こぼれ話

●ヒガンバナ (別名. マンジュシャゲ)

「ヒガンバナは葉がなくて何故花が咲くの」あるときこんな質問を受けたことがある。秋のお彼岸頃になると土手や畦畔、荒地地に赤い大きな花を咲かせるヒガンバナは、よく目立ち、秋を知らせてくれる雑草である。

ヒガンバナは秋の彼岸の頃になると確実に花を咲かせることからヒガンバナの名があり、多くの花茎が株立ちとなって、先に赤い花をカンザシ状に多数咲かせるが、葉は1枚もなく花茎だけである。葉がなくて何故花が咲くのかと疑問に思うのは当然のことである。実はヒガンバナは葉と花は別々の時期に生育し、花が終る10月頃に花茎は枯れて今度は葉が出る。葉は線形の濃緑色で多数叢生し、そのまま冬を越し、翌年の3月頃まで生長して、地中の鱗茎に養分を十分貯め込んで、初夏には枯れ、秋の彼岸の頃に養分が十分貯えられた鱗茎から花茎が伸びて花を着ける。このように葉と花が別々に生育するものにはこの他キツネノカミソリなどがある。

ヒガンバナの鱗茎には有毒成分のリコリンというアルカロイドを含み、そのまま食べると嘔吐、下痢、呼吸困難などを起こす有毒植物で、春先ノビルやアサツキと間違っただけで中毒を起こす例もあるので注意したいものである。

「毒と薬は紙一重」この有毒な鱗茎も利用の仕方によっては薬になる。民間薬として古くから鱗茎をすりつぶして、はれものや乳腺炎

の初期に去炎薬として使われたり、催吐薬として利用されてきた。また、鱗茎をつぶして水によく晒すとアルカロイドが流失してでん粉が取れ、これが食用となることから、昔飢饉の際にはヒガンバナからでん粉を取り、食用にして飢を忍んだといわれている。

山野に自生する草木のうち凶作やその他非常時に、植物の果実、種子、茎や葉、塊茎・地下茎などが食用として食べることができる植物を「救荒植物」というが、ヒガンバナもその一つでクズ、ワラビなどととも救荒植物の代表的なものである。

今年の9月下旬岡山から瀬戸大橋を渡り、JRの土讃線で高知まで旅をした。溪谷美で知られる大步危(おおぼけ)を過ぎ四国山脈を越えて、高知側の下りに差しかかる大豊町を通ったとき、両側は斜度50~60度を越すような山の斜面、そこに人家が点々と散在し、谷側には段々畑や棚田が拓かれていた。その急斜面でしかも高い畦畔にヒガンバナが一面にはえ、畦畔全体が赤い花で埋まっていた実に見事な景観であった。こうした景観は随所で見られた。山村の厳しい環境でその昔は飢饉に見舞われたことが度々あったに違いない。先人達はこうした非常時に備え救荒植物としてヒガンバナを植えたのだろう。その名残が今は美しい景観として残っているのではないだろうか、一人想像に耽けたひと時であった (㊦)